幼児教育メディアを創る心理学

チャイルド・ラボ 所長
沢井佳子（さわい　よしこ）

Profile ── **沢井佳子**
学習院大学文学部心理学科卒業。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学。文教大学人間科学部講師などを経て現職。専門は認知発達支援と視聴覚教育設計。日本子ども学会常任理事。

視聴覚教育メディアを用いた認知発達支援

子ども向けのTV教育番組やDVDなどの映像制作，知育玩具の設計，絵本やワークブックなどの出版物の編集，またはタブレットPC用のデジタル教材制作などにおいて，心理学監修およびコンテンツ開発をすることが，私の仕事の中核です。発達心理学や学習心理学の知見に基づき，子どもの目や耳や手に届けるものを設計する仕事です。風呂敷を広げて申せば「子どもの脳に届ける刺激を，心理学的にデザインする仕事」と言えるかもしれません。

現在私は，幼児教育シリーズ『こどもちゃれんじ』（ベネッセコーポレーション）の「考える力」プログラムの監修者として，1歳から6歳までの幼児向けの映像，本，玩具の制作に携わっています。

幼児の健やかな認知発達を支援するためには，各年齢段階における短期記憶の容量，表象能力，言語発達，数概念や論理の理解，動作の巧緻性，親子の相互作用の促進等々にも配慮し，映像も玩具も緻密に設計されねばなりません。見聞の面白さを増す，ユーモアや美しさも重要です。

制作スタッフとの企画会議において，判断の拠り所は，ピアジェをはじめとする発達心理学の知見が中心です。が，電子教具の学習プログラムを設計する際は，スキナーの系譜の行動主義理論も有効だと実感しています。

心理学の学問知は「幼児の思考をはぐくむ遊び」に科学的構造を与えてくれるのです。

ガチャピン&ムックとしまじろうを同僚として

こうした仕事の原点は，ガチャピン＆ムックと共に働いた28年前にあります。1973年に放送が開始された幼児教育番組『ひらけ！ポンキッキ』（フジテレビ）は，その開発と監修に心理学者が深く関与していました。東洋先生，永野重史先生，新田倫義先生，藤永保先生ら四人の監修者は「主体的に情報を処理する能力を育て……質のよい知的構造の形成と深化をめざす」という理念を掲げ，論理概念すらも面白いアニメで見せる映像手法を開発しました。

このポンキッキの心理学スタッフを，私は1984年から5年間務めました。内田伸子先生のご指導の下で修士論文を書き終え，博士課程に進んだばかりの大学院生でしたが，毎週の番組企画会議に出て，ガチャピンのセリフから歌企画に至るまで，幼児にわかる表現かをチェックしたり，視聴調査を実施したりして，心理学の観点から教育映像のコンテンツ開発に携わりました。

88年にポンキッキの監修体制が終了し，その年に私は母親となり，大学で学習心理学や発達心理学を講じるようになったのですが，

沢井佳子（写真左）メルボルンの幼児教育施設の取材で

左から，ガチャピン&ムック『ひらけ!ポンキッキ』（フジテレビ）**しまじろう，ヤーダン『こどもちゃれんじ』**（ベネッセコーポレーション）

「視聴覚メディアの物作り」への愛着から，2000年にチャイルド・ラボという個人事務所を設立しました。今世紀からは，しまじろうが同僚となり，『こどもちゃれんじ』の監修の仕事が増えていったのです。そして今年2012年は，1～2歳児向け『ぷち』DVDの新シリーズや，新番組『しまじろうのわお!』（テレビ東京）などの監修を手掛けます。『ぷち』の新キャラクター「ヤーダン」は，私が名づけ親ですが，「ヤーダ！」と口をとがらす，2歳児の仲間です。

幼児の共感を得るものには，国境を越えて理解される普遍性があります。今後は，海外の幼児とも交流し，心理学の実験・調査の手法を駆使して「思想は高く，ことばは低く」「遊びと学びを深めるメディア」を創ってゆきたいと願っております。